
銃弾とたんぽぽ

三沢かも

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

銃弾とたんぽぽ

【Nコード】

N1312E

【作者名】

三沢かも

【あらすじ】

東京郊外のある街。続く紛争。普通の大学生。銃弾の間を縫う恋愛。昨日もいつものように空襲があった。そして今日はみんな何もなかったように大学へ行き、買い物をする。

空襲、恋人、ファンタジー

街は賑わっていた。昨日の空襲が嘘のようだ。

僕はその賑わいを恨めしく思いながら、駅前の商店街をマフラーに顔をうずめて歩いていた。

今朝の民主ニュースのキャスターは無表情な顔で

「昨日の空襲の被害は死者3名、負傷者5名」

と事務的な様子で言った。僕はその「被害」という言葉が妙に気に障った。

確認された爆撃機は3機だったから規模の割に死傷者は少なかったと言っていていかもしれない。

3機の爆撃機は僕らの街の上を飛び越え、東にある統一軍の基地を目指して飛んでいたらしい。

結局、基地を目指していた爆撃機は統一軍の迎撃を受けて引き返した。

きっと、その帰り道に思い出したように僕らの街へ爆弾を落としたのだろう。

慌てていたに違いない、落とした爆弾の数は少なかった。ろくに狙

いもつけなかつたのだらう。わずかに落ちた爆弾も、そのほとんどは市街地から離れた畑に落ちた。

空襲は2週間前にもあり、その時は死者も50人以上出た。

街がいつもと変わらず明るいののはきつと「あの時の空襲よりは」という思いがみんなのどこかにあつたからかもしれない。

長く続く紛争に、みんな感覚が麻痺しているのだ。死者が出ていることに変わりはない。そう叫びたかつた。

もつとも、叫んだところで何も意味はない。みんなわかっていることだ。

おそらく僕も、普段の空襲だったらみんなと同じように笑顔で商店街を歩いていただらう。

僕がこんな不機嫌な顔をして商店街を歩いているのは、昨日の空襲が僕にとって他人事ではなかつたからだ。

昨日の空襲で亡くなつた一人は高等学校時代の友人だつた。特に仲が良かった、というわけではなかつたけれども、それでもやはり知人の死というものは重いものだつた。

あんな規模の小さい空襲で死んでしまつたという不運も、ぼくをとつともなくやるせない思いにさせた。笑顔で買い物をしている街の人々が、無性に腹立たしかつた。

僕は緑色の看板を出している喫茶店に入り、コーヒーを飲みながら水野を待つことにした。

窓際の席に座り、タバコに火をつけて外を眺めているとやはり街は賑わっている。

最近は統一軍の防衛線が不安定になったのか、解放軍の航空部隊が上手なのか、とにかく空襲の頻度が多くなってきた。

不思議なことに、空襲が多くなるほど、街のにぎわいも増してきているように思える。

なぜこんな状況で笑ってられるのだろうか。そんな人は強いものだろうか。いや、違う。きっとみんな不安なのだ。

不安が空疎な笑いを招いている。それだけのこともかもしれない。

僕はタバコの煙を胸一杯吸い込んだ。こほこほ、と乾いた咳がでた。

水野は僕がタバコをちょうど一本吸い終えようかというところでやつてきた。

ふうと息をはいて、僕の隣の席に座り、少しパーマのかかったショートカットの後ろ髪を伸ばすような仕草をしながら、

「お待たせ」

と笑顔で言った。

水野は大学に入ってから知り合ったから、昨日死んだ僕の友人のこととは知らない。それは、しょうがないことだ。

「きたよ。協力要請状」

僕はタバコの火を灰皿の淵に当てて消しながら言った。

水野の顔からは笑顔が消え、

「そこ」

と言い、それ以上何も言わなかった。

協力要請状とは、21歳以上の徴兵期間を終えた者に届けられる軍務協力要請状のことだった。

要請に許諾すると、統一軍人として軍務につく。

先月まで大学生への要請状送付は学業を妨げるという配慮からなされていなかった。軍司令部が大学生への要請状送付に踏み切ったのはつい先日のことだ。今年24歳で大学四年になる僕のところへも思ったより早く要請状が届いた。

「まさか、許諾しないよね」

水野が僕に聞いた。

「どうせ、いずれ強制徴兵だよ。」

統一軍は下級將校級の人材が不足しているという話だった。

幹部候補生の軍事大学出身者以外は、軍に入隊するとそのほとんどが二等兵か一等兵として各隊に配属される。

ごくまれに兵長クラスとして待遇される程度だ。しかし今は下級將校級の人材が不足している分、本来職業軍人の階級である伍長にいきなり任官されることもあるらしい。昇進も早いという話を聞く。

それだけでも統一軍の質の悪さというのが分かるが、強制徴兵が近

いという噂もそういう現状から広まり、僕の耳に入ったのだろう。

四年前、徴兵時のあの冷たい銃の感触が手に蘇る。

引き金を引いた時の乾いた破裂音。はじめて銃を撃った時、これは人間が作ってはいけないものだと思った。背筋が冷たくなり、感情はなくなる。隣で銃を撃つ同僚たちの目は、思わず目を逸らしたくなった。あれは人の目ではない。

僕が水野の方を見ると、水野はものすごく心配そうな顔をして僕を見つめていた。僕は思わず

「もちろん行かないさ」

と言った。

軍務に就いたら水野に会える時間が少なくなる。寮生活になるからだ。

水野は安心した顔になり、僕の手をとり

「行くっ」

と言った。僕らは映画を見に行くことになっていた。

水野が見たいと言ったのは「ファンタジー超大作」という肩書の、しゃべるクマが主人公の映画だった。映画に真剣に見入っている水野の横で、僕は映画を見ている間、二年間の徴兵期間のことを思い出していた。

衝突、恐怖、不運（前書き）

水野と映画を見に来た僕。頭の中に徴兵時代の記憶が蘇る。それは、
凄惨な戦場の記憶だった。

衝突、恐怖、不運

統一軍と解放軍の軍事衝突が始まったのは、徴兵の二年目が始まってすぐの頃だった。

受動的に、無難に、そう兵役生活を終わりたいと思っていた僕たちにとって、それは不幸なことだった。

軍事衝突は唐突なものだった。

軍にいた僕らでさえも、開戦の情報は事後通達という形で伝えられた。

すでに数年前から情勢は緊迫していたから、いつ開戦になってもおかしくないという認識はあった。

しかし徴収兵の僕らとしては、前線に送られるかも知れないという不安が戦争という殺人連鎖を現実のものとして認識させ、開戦通達を聞いて脱走しようとしたものも出た。

開戦通達を上官から聞かされた時、同期生の前園は涙を流し、高井はひたすらに上官を睨みつけていた。僕はただ、茫然としていた。

事実僕らは9ヶ月後に前線に派遣された。

徴兵期間を3か月残し、武蔵野基地の僕と僕の同期入隊100人はそれをまとめる職業軍人20人とともに第十一師団（武蔵野）歩兵第五中隊として前線に送られた。

当時の統一軍と解放軍との武力均衡線は山岳地帯にあったから、僕らは降りしきる雪の中、大げさな登山ブーツに外套という大げさな格好で銃をかつがなければならなかった。

過酷な条件下の任務だった。

前線戦力のほとんどには僕らのような徴収兵があてられる。

司令部からしたら消耗品扱いだ。

訓練成績から最下級である二等兵から一等兵に昇進していた僕と前園と高井だったが、その昇進が裏目に出て、ほかの同僚たちより一足早く最前線の哨戒部隊へと三人まとめて配属された

僕らの上官は杉浦曹長という三十前後の職業軍人で、開戦時から前線部隊として勤めており、幾度の交戦経験とその実績から先月曹長に昇格していた統一軍では歴戦の男だ。

先々週の配属替えで、僕らの新米部隊の小隊長に就いていた。

まさに鬼軍曹と呼ばれていた男で、高井はもうすでに10回は殴られたはずだ。

そんな杉浦曹長率いる新米部隊のはじめての任務は前線歩哨間の哨戒だった。

僕らの場合それが初めての交戦にもなった。

戦力均衡線になっている尾根に沿って建てられた歩哨を巡回するという任務だった。

前日まで降り続いていた雪がやみ、太陽は東の山と山の間沈んでいた。気温が一気に下がり、支給された簡易カイロはすでにぬくもりを失っていたから、僕は皮手袋の上から息を吹きかけ、常に手を温め続けなくてはならなかった。

巡回コース中には三か所の歩哨が設置されていたが、一つ目の歩哨を通過し、小高い丘を一つ越えたところで、銃声が前方からこえた。

さらに接近すると第二目的地の歩哨が戦闘中だということがわかった。

サーチライトが照射されている。

解放軍の奇襲を受けたのだと杉浦曹長は判断した。解放軍の奇襲部隊の規模はおそらく1個小隊（20人）ほどで、統一軍の歩哨を守るのはたった1個分隊だった。苦戦しているに違いなかった。

僕らの哨戒部隊はわずか2個分隊（10人）の規模だったが、杉浦曹長は迷わず援護を決定した。

杉浦曹長は落ち着いた様子で、司令部に無線を入れた。攻撃を受けている前方の歩哨へも連絡を試みたが、無線は不通だった。すでに通信機器が破壊されているのかもしれない。

こだまする銃声の中、僕は必死に恐怖と闘っていた。

心のどこかでこのような事が起こらないように祈っていた自分に気づいた。

気温も低かったが、それ以上に銃身の冷たさが連続している乾いた銃声によって助長され、寒さが異常なくらい体に浸透していくような気がした。

前園の顔からも、恐怖がはつきりとみられる。銃を持つ手の指も小刻みに震えていた。高井は無表情だったが、さつき締めたばかりのはずのブーツのひもをもう一度締め直していた。

僕らの小隊で実戦経験を持っているのは隊長の杉浦曹長と、やはり職業軍人の深井伍長だけだった。

あとは徴兵の昇進組だけで構成された実戦未経験メンバーで、とても戦力とは言えないものだった。そもそもこの任務も哨戒が目的であり、戦闘は目的とされていない。初任務で目的外の交戦。僕らは要するに運がなかった。

銃弾、血痕、勝利

「匍匐前進、合図とともに撃て」

杉浦曹長のその声は普段の荒々しさと比べると、気味が悪いほど落ち着いていた。

杉浦曹長は部下を散開させ、匍匐前進しながら奇襲部隊に接近するように指示を出した。歴戦の男だっただけに冷静な対応だった。

僕らは黙ってうなずき、二人一組になって散開した。

僕は高井と組が同じだった。前園は杉浦曹長と組になっている。雪の上を匍匐して歩哨に近づくにつれ、前方の様子が分かってきた。攻撃を受けている歩哨は簡易式のもので、自然に作られた小高い丘の上に建てられている。廻りには壕が掘られているが、今そこを守る人数は少ない。解放軍の奇襲部隊は散開して銃撃を続けているが、歩哨の上に設置された機関銃のために攻撃に手間取っているようだった。

僕らは側面から戦闘に介入する形になっていた。

正面に歩哨を、そして左前方に解放軍奇襲部隊を見る形になる。掘られた壕の向こう側に、土の盛り上がったような塊がいくつも見える。それが人だと気づいたとき、僕は思わず身を起きあげそうになった。

その時、頭上に赤い照明弾が上がった。

攻撃開始の合図だった。

解放軍にも援護部隊の居場所を知られてしまうことになるが、歩哨の防衛隊にも援軍到来を伝えることができる。

まっさきに杉浦曹長が発砲し、叫びながら突撃した。高井もそれに続く。やや出遅れた僕と前園も、前を走る二人を援護しながら飛び出した。

夢中だった。

障害物に隠れながら銃撃している解放軍の人影がはつきり見えた。弾が当たったのか、うずくまる人影もはつきり見えたが、誰の弾が当たったのかとは考えなかった。

銃声がいきなり盛んになる。耳の横を銃弾が空気を切り裂きながら飛び去っていく。解放軍にはまだ完全にこちらの正確な場所も人数も捕捉されていない。奇襲攻撃は効果的だった。僕らは転がり込むように壕に飛び込み、前方に向けて射撃し続けた。

横を見ると杉浦曹長は身を乗り出して小銃を構え、射撃していた。銃だけ頭上に出して照準もせずに射撃している僕や前園とは全く違う。高井はやや顔を出していたが、照準がろくにできていないところは僕らと変わらない。

後方から頭上に鳴り響く機関銃の連射音が頼もしく聞こえた。

戦力的にはまだ僕らの方が劣勢だったが、解放軍の射撃の間隔が長くなってきた。防御陣地があるというのと、意表をついたという効果はとても大きい。

解放軍は撤退を開始したのだろうか、次第に前方からの銃声は聞こえなくなった。

僕は恐る恐る壕から顔を出して様子をうかがった。近くに解放軍らしい人影は見えなかった。気配がない。サーチライトは遠くを照射し、歩哨上から一人が遠くに向けて小銃を発砲している。逃げてい

る兵を狙っているのだろうか。

戦闘はまもなくおさまった。

あつという間だったのか、それとも長かったのか。僕にはそのどちらとも言えなかった。

しかしその間にも確実に数人の命が消えた。

解放軍は3名の遺体と5名の負傷者を残して撤退した。

負傷者のうち2人は間もなく亡くなり、一人は重傷で、軽傷の残りは捕虜になった。

僕ら統一軍側も3人を亡くし、数人の負傷者を出した。

なくなつた3人のうちの2人は歩哨に駐留していた警戒兵で、解放軍の奇襲攻撃第一の犠牲者だった。同時に体中に銃撃を受け即死だった。

もう一人は杉浦曹長だった。

解放軍が去つたあと、「打ち方やめ」の合図がいつまでたつても出ないことを不審に思い、深井伍長が様子を伺うと、銃を構えたまま倒れこんでいた杉浦曹長の姿があつた。

すでに死んでいた。

左胸を撃ち抜かれており、大量の血痕が足元に広がっていた。それでも銃を立射し続け、応急処置のあとであつたという。

信じられなかった。

こころのどこかに生じ始めていた戦闘の勝利感は、その事実で完全

に消え去った。

特に二人一組を組んでいた前園には相当の衝撃を与えた。
彼は

「自分の援護が甘かったからだ」

と泣き続け、僕と高井が何を言っても自分を責め続けた。

帰還、駄作、たんぼぼ

僕らが杉浦准尉の遺体を司令部に運び込んだ頃には、事態の全体像が明らかになり始めていた。

戦闘は数か所同時に発生しており、事実解放軍に占拠された歩哨も存在した。

事前に通信設備を破壊してからの襲撃だったことを考えても、解放軍にとって周到な準備の上の作戦だったのだろう。

結果的には杉浦大尉の司令部に対する迅速な無線通報が統一軍の反撃態勢を迅速に準備させ、僕らが防衛成功した歩哨を含め、大部分の歩哨は防衛に成功した。

解放軍は統一軍の前線歩哨占拠に続く第二段作戦として主力投入を計画していただろうが、統一軍はその主力投入への移行をなんとか防いだ。

両軍合わせて30名以上の犠牲が出たらしい。

戦闘初期の当時としては大規模なものだった。

僕らはその戦闘を評価されたが、杉浦曹長の殉職と、現場に残された遺体は、僕らに改めて戦争を戦争として認識させた。それはただの殺人行為だった。

その後徴兵を解かれたぼくと高井は東京へ帰り、大学生となった。

前園は合格していた大学の入学を取り消し、軍へ残った。

映画が終わった。

今頃では珍しく内容のない映画だった。それでも水野は満足そうであんな顔をしていた僕も、その笑顔を見てつい微笑んでしまった。

水野はまだ銃声を知らない。

僕は水野と一緒にいるとき、戦争の話はあまり話さない。水野も聞かない。

その話題は二人の間のグレイゾーンのようになっていた。

しかし、空襲が始まってからいつまでもそういうわけにもいかなかった。鼻をふさいでもやはり三階から上が消失したビルは建っていたし、クラス名簿から消えた名前は忘れるわけにはいかなかった。

水野はけなげに笑い続けた。遊園地のお化け屋敷にも入れず、ホラー映画は予告すら見られないのに、戦争の現実にはすこしも恐怖を見せなかった。

僕はそんなに強くなかった。

空襲警報が鳴り、徴兵時のことを思い出すと身がすくみそうになる程の恐怖にさいなまれた。そんな時、僕は思いきり強く水野を抱きしめた。

高井が水野の笑顔を見て、

「たんぽぽの笑顔だね。」と僕に言ったことがある。

僕は水野を抱きしめるたびに、その言葉を思い出した。

嘘、検査、出撃

結局、僕は水野に嘘をつくことになった。

徴集は想像以上の強制力を持っていた。軍は5年前とはまったくもってその体質を変えてしまっていたのだ。

市民のための市民の軍はいつのまにか、どうやら僕らの知らない世界の人々の持ち物になってしまったようだった。僕と高井は徴集拒否の方法をいろいろな方面から探したが、どの方向から探しても、最後の最後でいつも強固な得体の知らない力によって道が遮られてしまった。

やむなく応召のサインをした時、高井は

「結局、俺らが学生だった4年間、あっちむいてほいに勝ち続けていたと錯覚していたようなもんだな」と言った。

「うそつき」

水野は僕との別れ際、一言そう言った。

「ごめん」と僕が返した時、水野は振り返って去って行った。

僕に同情してくれた同期もいたが、高井だけは「うん、確かにうそはよくないなあ」と乾いた笑顔で僕のことを責めた。そのことは僕を少なからず傷つけた。

僕らは第十一師団（武蔵野）の兵舎に入った。

あつけないほどの簡易的な手続きと身体検査で僕らは各部隊に配属された。

僕と同時期に徴集されたのは全部で100名ほど、全員大学の4年生だ。つまり開戦を徴兵2年目で迎えた世代ということになる。

第十一師団は5年前とは編成が変わり、現在2つの歩兵連隊と砲火を担う1つの特科連隊からなっている。

僕は第32歩兵大隊第一中隊付き、高井は同大隊第二中隊付きとなった。二人とも階級は少尉だった。

「ははは、あつたいう間に杉本曹長を飛び越えてしまったなあ」と高井はさみしそうに笑った。

少尉は曹長より二階級上だった。職業軍人だった杉本曹長でさえ少尉へは生涯かけて進級できない少尉へと、僕らは簡単な身体検査とわずかな期間の徴兵歴だけで少尉へと抜擢された。

これらの事実だけでも将校が不足しているという噂は本当だということがわかる。

敗軍は圧倒的に将校級が不足する。なぜなら将校級は一般兵に先立って陣頭に立ち、指揮をする必要があるからで、死傷率が最も高いからだった。一方で小戦闘における軍の強さというものは将校級の能力に影響されることが大きい。

いわゆる負の連鎖へと統一軍は陥っているのかもしれない。

杉本曹長の言葉を思い出す。

「戦国の武士たちは、能力さえあれば仕える殿様を選ぶこともできたが、俺たちにはそれができない。統一軍の統治下に生まれれば統一軍人になり、解放軍の統治下に生まれれば解放軍人になる。それ以上でもそれ以下でもない。いつそわかりやすくいいか」杉本曹長はそう言って力なく笑った。

「わかりやすくいいか」

僕がぼやくように言うと、高井は

「あきらめやすくいいって俺には聞こえるな」

といった。僕はうなずいた。

当然、訓練というようなものはなく、僕らは配属発表当日から実戦訓練へと駆り出された。

実戦といっても、中隊付き将校の僕らなど、まれに特務小隊を率いて前線に飛び出す程度で、その業務の大半は隊の事務作業をこなすことだった。

兵站部や経理部などからは毎日いやになるほどの督促や受理不可と書かれた書類が届いた。もっとも苦勞したのは上級司令部からの指令の処理だった。理不尽なものなどはまだよく、時に指令は矛盾した。

第32歩兵大隊第一中隊の大隊長は磯辺大尉という僕や高井より3つか4つほどしか変わらない若い男だった。次々と死んでいく往年の職業軍人を傍目に開戦からこつこつと昇進し、とうとう今年の4月1日付で中隊長に抜擢された将校らしい。若くはあったが、開戦当初からの実戦の経験だけは豊富だという。確かに5年間もいれば、この年齢でもおおよそのベテランといえる。実戦での能力は凶りかねる一面もあるが、そもそも能力があるうともなかるうとも、選択の権利など僕らには与えられていないことを考えれば、どうでもいいことだった。

第32歩兵大隊に出撃命令が下ったのは、僕らが再徴集されてちょうどひと月たった日だった。第32歩兵大隊は第11師団（武蔵野）で唯一基地に残されていた現役部隊であったから、これで武蔵野基地の戦力はとうとう払底することになった。

それまで前線に出撃命令が出ていたのは主に前線の師団や東北地方の師団が中心だった。

しかし戦線が後退し、第9師団（浜松）、第3師団（静岡）が壊滅した今はもはや僕らの第11師団（武蔵野）も前線に位置している師団といってよかった。首都機能を仙台に移行するという噂が流れている今となつてはもはや守戦側としては難しい東京を防衛するのは意味をなしていないのかもしれない。出撃は当然といえば当然だった。

出撃命令が下つたその日、僕は寮に入つて以来、初めて水野に電話をした。

呼び出し音が2回鳴り、水野はもしもし、とぼつの悪そうな声で電話口に出た。

「明日、甲府へ出撃命令が出たよ。最前線基地だ」

「そう」

「絶対帰ってくるから、待ってて欲しい」

「…」

「じゃあ、切るね」

「気をつけて」

電話はぎこちない会話を吸いこみ、チンと小さな音を立てて静まり返った。

懇願、自責、仮眠

甲府へは甲州街道をひたすらに西へと行軍していいく。僕には第32歩兵大隊の車両手配が命じられた。

たった数時間、しかも3000人程度の移動にすぎなかったが、それでも人や装備を運ぶトラックはことごとく前線や他の師団に出払ってしまっていて、必要なだけの車両を用意するのはひどく骨の折れる仕事だった。僕は毎日けんもほろろになりつつも、それこそ1時間に1回は総司令部の兵站部に電話をかけつづけ、必要分のトラックを回してくれるように懇願した。

それでも兵站部の担当兵はなかなか首を縦には振らず、時には上空で、時には激しく怒気を発して僕の懇願を拒否し続けた。僕はその間にとことん兵站部の担当兵を嫌いになった。

結局、トラックは間に合わなかった。

ようやく兵站部の担当兵が首を縦に振ったと思ったら、その搬送日は行軍予定日の1か月も後だった。僕は、間に合わないことはわかっ

ていつつも精一杯の明るい声で、

「ではよろしくお願いします」

と言って、電話を投げつけるように切った。トラックは必要分の2/3程度しかなかった。やむなく僕は地元

の民間企業を歩き回り、トラックの払い下げを要求した。要求されれば企業に拒否する選択肢はない。

軍はそれだけ法律によって守られる立場になっている。突然似合わない軍服を着たわけのわからない小坊主が現れ、貴重な商売道具であるトラックをただ同然に持っていかれる。

時に殴られ、時に泣かれ、時に呆然と立ち尽くされた。

理不尽を強要する立場になることで、僕は初めて自分が戦争の被害者から加害者になったことを認識した。

ふと、そのたびに水野の顔が思い出される。彼女と僕は今、違う立場に身を置いている。

もしこのまま戦いが長引けば僕らの間にもそのような強要や理不尽が生まれるかもしれない。その時僕はどのような顔をして水野に会い、水野はどのような顔をして僕に会うのだろうか。

僕はそのことを考え始めるたび、そのおぞましい想像をあわてて消し去り、ごまかすようにタバコに火をつけた。

ようやくすべてのトラックを手配し終えたのは信じられないことに
出撃2日前だった。

やっとの思いで手配したトラックだったが、それはそれはひどいものだった。中でも兵站部に回してもらった中には銃弾で開いたと思われる穴と血痕がこびりついているものすらあった。

そのことからしても、僕らの出撃前の戦意はお世辞にも高いとはい難かった。

行軍は夜に肅然と、そして漠然に行われた。夜にしか行軍がなされたのは関東上空の制空権を失っている今、昼間の行軍は解放軍にとって、ここを爆撃してくださいと言ってるようなものだからだった。行軍の列は何度かの停止を繰り返した。

ところどころの軍用路が空襲によって破壊されてしまっており、時にトラックが道路に空いた穴にタイヤを落として立ち往生してしまっただからだ。

僕はそのたびに現場へと駆けつけ、トラックを押し出し、土木工事の交通規制員のように行軍列を誘導した。

縦に長く伸びきった車列調整のために、一度八王子の郊外で車列を停止させた。僕と高井はそのときに喫煙所で出会った。

「ひどいもんだ。多摩川が三途の川に思えたよ」

高井は軽く笑いながらそう言ったが、僕には苦笑しかできなかった。

「花畑もないあの世なんて。穴ぼこだらけだ」

高井は乾いた笑い声をあげてタバコをつまらなそうに吸った。

「ごめん、こんな車列しか用意できてなくて。おまけにこんな調子じゃ」

僕がそう言いかけると高井は遮って言った。

「どうせ着いても待つてるのはタコ部屋と乾パンだけだよ。だったら、このことあまり変わらないさ」

高井は今回の出撃に際しては甲府基地における宿泊所の手配を担当していた。

「ひどいもんだよ。人が入ってはいなくなるものだから、先方ももうどの部屋に人がいて、どの部屋に人がいないかわからないんだ。こちらが行っても全員ベッドで寝れるとは限らない」

僕は、あまりに暗いその事実言葉に言葉を失った。

甲府基地へ到着したのは予定を大幅に遅れた午前3時だった。

僕と同僚である行軍路の担当兵はその責任から懲戒処分を受けた。

多少なりとも車両手配をしていた僕にも責任がある。僕は叱責を受けた同僚のもとへ行って詫びた。彼は、疲れた顔をしてうなずいただけだった。

装備を所定の場所へ運びいれ、各宿舎に散って仮眠をとれたのは夜が明けた後だった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1312e/>

銃弾とたんぽぽ

2011年1月16日05時19分発行